

吃音のある児童の自尊感情に関わる因子の探索

○小宮歩

(筑波大学人間総合科学研究科)

宮本昌子

(筑波大学人間系)

KEY WORDS: 吃音 自尊感情 学齢期

I. 問題の所在と目的

学齢期の吃音では自己肯定感や自己有能感、自尊感情の向上を目指す指導・支援が期待され(小林, 2014)、児童らが通う言語障害通級指導教室でも重要視されつつある。しかし、吃音児の自尊感情について明らかにした研究は国内外で少ない。本研究の目的は、太田・長澤(2004b, 2005他)による報告から10年経った現在、指導・支援に有効なモデルの再提案を目指し、吃音のある児童の自尊感情の高さ、自尊感情に関わる因子の再検討を行うことである。

II. 方法

1. 吃音を主訴とし、言語障害通級指導教室に通級する児童

1) 対象者: 吃音を主訴とし、言語障害通級指導教室に通級する吃音児273名(男子208名、女子64名、無回答1名)。関東近郊にある言語障害通級指導教室が設置されている小学校578校に往復はがきによる調査協力依頼を行い、このうち104校の言語障害通級指導教室で指導を受ける吃音児から協力を得た。このうち73校から回答を得た。回答を得た児童の学年は1~6年生であったが、今回の分析対象は太田・長澤(2004)にならない、3~6年生とした。

2) 質問紙: 以下(A)(B)を実施した。

(A)「あなた自身のことについて」(児童用): 自尊感情尺度(太田・長澤, 2004)の42項目に家族と話し方について話題にする経験や習い事に関する質問項目を追加し、全45項目とした。自尊感情尺度に関する全42項目の回答には三件法を用い、自尊感情レベルの高い順に3~1点とした。自尊感情尺度全42項目の合計点を自尊感情得点(以下SE得点)とした(理論値126~42点)。

(B) お子様の概要について(保護者用): 小林・宮本・吉田(2015)の「お子様の概要について」に、児童のプロフィールなどに関する項目を追加した全24項目とした。

2. A 小学校の通常学級に在籍する児童

1) 対象者: A 小学校の通常学級に在籍する151名(男子82名、女子69名)(以下、非吃音児)。筆者がA小学校の3~6年生の各通常学級で質問紙調査を実施した(吃音のある児童を除外することはできなかった)。

2) 質問紙: 1.に記した(A)の42項目を実施した。

3. 分析方法: 吃音児と非吃音児のSE得点の比較、自尊感情に関わる因子探索のため、統計パッケージSPSS(International Business Machines, Japan)を用い、解析を行った。

III. 結果

分析対象は193名(男子147名、女子46名)であり、3年生67人、4年生53人、5年生37人、6年生36人であった。非吃音児の分析対象は151名(男子82名、女子69名)であった。

1. 吃音児と非吃音児における自尊感情得点の比較

対象者のSE得点に関して吃音の有無・学年・性別の3要因分散分析および多重比較を有意水準5%にて行なったところ、吃音、学年、性別のいずれにも主効果はみられず、交互作用もみられなかった。

2. 吃音児における自尊感情の因子

吃音児の得点化したSE尺度42項目に対し、因子分析(主

因子法、プロマックス回転:斜交回転)を行なった。因子数は固有値1以上の基準を設け、スクリープロットに基づいて3因子とした。その結果、達成動機因子、自信因子、家族・自己受容因子に分類された。

3. 非吃音児における自尊感情の因子

非吃音児の得点化したSE尺度42項目に対し、因子分析(主因子法、プロマックス回転:斜交回転)を行なった。吃音児と同様の手続きで、因子は3因子とした。その結果、自信因子、達成動機因子、受容・充実因子に分類された。

4. 吃音の話題有無による自尊感情得点の比較

SE得点に対する、親との吃音の話題の有無の効果を測定するために、有意水準5%で両側検定のt検定を行ったところ、有意差($t(175)=-2.68, p<0.05$, 無<有)が見られた。SE得点に関する因子の効果を測定するため、2要因(吃音の話題有無*因子)の分散分析および多重比較(Bonferroni)を有意水準5%にて行なったところ、吃音の話題有無($F(1, 489)=10.90, p<0.05$)、因子($F(2, 489)=1177.30$)の主効果が見られ、吃音の話題有無と因子の交互作用($F(2, 489)=7.84, p<0.05$)が見られた。多重比較の結果、話す群が、話さない群に比べて達成動機因子得点が高いことが分かった。

IV. 考察

吃音児と非吃音児の因子構造については、太田・長澤(2004b)の結果を支持するものとなった。また、親と吃音のことを話す子どもは、自尊感情得点が高い傾向があるという結果が得られ、Van Riper(1971)による、親が吃音を話題にしないことが自尊感情の形成に好ましくない影響があるという指摘を支持する結果となった。また、親と吃音のことを話す子どもは、そうでない子どもに比べて達成動機因子も高い傾向にあることが分かった。太田・長澤(2004b)によると、達成動機因子とは、人の役に立ったり、失敗しても自分を励ましたり、しなければならぬことに一生懸命取り組んだり、嫌いな友達の長所も認められるなどの、すばらしい人になりたいという願望を持っていることを表している。太田・長澤(2005)では、親が吃音を話題にする経験要因については、自己受容因子とのみ関連がみられたが、本研究では異なる知見が得られた。その理由として、太田・長澤(2005)では、吃音を話題にするかという問いに対して保護者から回答を得ているが、本研究では児童から回答を得ていることが考えられる。どのような吃音の話題が、児童の自尊感情に影響するののかについては、今後、さらなる調査が必要である。

文献

太田真紀・長澤泰子(2004b) 学齢期における吃音児の自尊感情の発達 -非吃音児の自尊感情との比較-. 特殊教育学研究, 42, 259-270.

太田真紀・長澤泰子(2005) 学齢期における吃音児の自尊感情の発達 -学校生活における能力および吃音を話題にする経験との関係-. 特殊教育学研究, 43, 255-264. 他

(KOMIYA Ayumu, MIYAMOTO Shoko)

*調査実施に貢献した西岡悠歩さんに感謝申し上げます。